

## 実践報告

# 現代日本社会における家庭の問題を考える

## —保育専攻「家庭問題特論」の試み—

Considering Family Issues in Japanese Modern Society: A Practical Study of "Advanced Seminar on Family Issues" in Advanced Program in Child Care and Education

三 神 敬 子, 野 中 弘 敏

Keiko MIKAMI, Hirotoshi NONAKA

### 概 要

本研究では、「豊かで創造的な人間性と実践力のある専門性を有する人間の育成」を目的とした山梨学院短期大学保育専攻必修科目「家庭問題特論」における学生の変化および成果を記述した。現代の日本社会にみられる家庭の問題、特に「障害」「母親」をめぐる問題を描くドラマ作品の視聴後、各作品担当グループの検討により見出されたテーマ・視点によるシンポジウム開催、という形で進められる授業の過程で、当初は「模範的」感想の目立った学生が、「自らを教材化しつつ」問うことを促され、葛藤しつつも「問う構えそのものへの問いかけ」を深めた。学生は「我々の懸命な理解を超えるほど、障害者や家族の苦しみの根は深いのだ」「我々も社会も『良い母親』を一方向的に押し付けるが、その前に母親も一人の人間なのだ」と考えるに至り、対人援助職を目指す者として、「自分の理解を超えた生があると認めて自他を懸命に省みる」あり方を培っていった。

### 1. はじめに—「家庭問題特論」がめざすもの

「家庭問題特論Ⅰ・Ⅱ」は、山梨学院短期大学（以下「本学」）専攻科保育専攻の修了要件科目として、教育・福祉の相談援助の区分の中に位置づけられた教科である。筆者（三神）は、これを「豊かで創造的な人間性と実践力のある専門性を有する人間の育成」を目的とした本学独自の教科として、開設以来さまざまに工夫検討してきた。特に、本学創立者が切望した、学生生活が「教養を広め、品性を高め、大いなるものの畏敬を知り、一生の支柱となるような力の根源、人生のよりどころを身につけることのできる」（創立者 古屋喜代子の学長就任時原稿（私信），1970）経験の場となるよう、さらに学生一人一人が「物事の表面

のみでなく、本質を見通す叡知、純粋な愛、万事を貫く強い意志」（同）を培うことができるよう、学生と共に試行錯誤を繰り返してきた教科である。

保育者の専門性のひとつである「対人援助技術」は、まぎれもない学生自身の価値観、人間観によって大きく左右される。それらがより深く培われるためには、短期大学での2年間の保育者養成で培われた専門的知識・技術の上に、さらに2年間の学びを重ねる専攻科としていかなる学習が必要か。まずそれが本教科の前提としての課題であった。

豊かな情操、幅広い視野は、どのような経験によって可能になるのか、学生が自ら主体的に思考をめぐらし、集団の中で、たしかな洞察力を身につけるためにはどのような方法があるのか、専攻科としても教科そのものとしても、目的はわかっていても実際の授業をどのように展開していけば

よいのか、苦しむ歲月であった。

## 2. 「家庭問題特論Ⅰ」（1年次）の到達目標と概要

保育専攻1年次の「家庭問題特論Ⅰ」では、教科の到達目標を、

1. 人間と家庭、家族と日常生活について、基本的概念を整理する
2. 現代社会と家庭の問題を幅広い視野でとらえ、課題意識を持つ
3. 保育者の視点に立ち、子どもと家庭の問題を考察する

の3項目とした。つまり、1年次には「家庭とは何か」を人間社会の最も基本的な問題として深く考えていくための基本的概念をたしかなものにし、実感的問題意識を持って、現代社会の家庭の問題を見つめるにあたっての基礎となる構えを養うことを目指した。その方法として、新聞等マスコミで取り上げられた家庭や家族の問題を軸に、ロールプレイングを用いてそれぞれの「家族の役割」の意味を考えた。

## 3. 「家庭問題特論Ⅱ」（2年次）の到達目標と進め方

2年次の「家庭問題特論Ⅱ」では、

1. 現代社会における家族と子どもの問題について、実感的問題意識を持つ
2. 家庭と子育ての問題を、我が国の少子化対策との関連で学び、大局的視野を持つ
3. 子育てを支援する保育者としての使命感を養う

の3項目を教科の到達目標とした。

「家庭問題特論Ⅰ」における学びの経験を土台に、「家庭問題特論Ⅱ」においては、最初に受講生全員が、現代の日本社会における家庭・家族の問題を扱った2つのドラマを視聴した。そしてこの「共通の精神的体験」をもとに、家庭と家族の問題を「人間の問題」として、グループで討議を重ねていった。

各ドラマを担当したグループでは、作品に見られた現代日本社会の家庭の「実態把握」、「問題点の整理」、「問題に対するそれぞれの認識や提言」等についての討議を経て、さらに深めたいと思う

ことがらを各グループのテーマとして絞り出し、シンポジウム形式により受講者全体でそれらのテーマを深めることとした。具体的な流れは、以下のとおりである。

1. 『くちづけ』および『Mother』（各作品の詳細は後述）のDVDを全員が視聴する
2. 全員で作品の感想を発表し合う
3. どちらのDVDで「家庭問題を掘り下げる」のか各々が選択する
4. それぞれのグループ内で、作品の題材について話し合う
5. シンポジウムにあたり、グループの皆が納得する共通のテーマを決める
6. テーマを複数の視点に細分化し、各視点について担当を決め、調べと考察を深める

シンポジウム準備にあたってのやりとりの過程で、担当教員である筆者（三神）は、それぞれのテーマを担当した学生が、単なる知識の積み上げを避け、あくまでも「自分を教材化」しながら具体的事例をもとに洞察を深めていくことに努めるよう意を払い、そのことで認識の変容、視野の広がりを各自が自覚できるように期待した。時間は要したが、たしかな価値観の形成を求めたのである。作品鑑賞の結果、学生が取り組んだ問題は「知的障害者を持つ家族の実態と課題」、そして「母親とは何だろう—様々な角度から見る母親像—」の2つとなった。

## 4. 教材について

共通体験の教材とした作品は、映画『くちづけ』と、テレビドラマ『Mother』である。各作品のストーリーの概要を以下に示す。

- (1) 映画『くちづけ』（原作・脚本：宅間孝行、監督：堤幸彦、2013年10月、東映）

漫画家・愛情いっぽん（阿波野幸助）は、男手ひとつで娘マコを育てている。7歳の心のまま大人になったマコは、施設に入ってもすぐに逃げ出してしまふほど繊細で、父親にしか心を許していない。マコが30歳になったある日、知的障害者が集団で生活するグループホーム・ひまわり荘で2人は生活することとなった。様々な人々とのふれあいで、マコは恋もし、安定した生活を取り戻せたかにみえた時、いっぽんに不治の病が見つかる。

死期が近づいたいっぽんは苦悩の挙句、マコを道連れに死を選んだのだった。

- (2) テレビドラマ『Mother』（脚本：坂元裕二、演出：水田伸生、長沼誠、2010年4月～6月、日本テレビ）

小学校の代用教員だった鈴原奈緒は、担任クラスの道木怜南が虐待を受けていることを知る。極寒の中ゴミ袋に入れられ捨てられていた怜南を発見した奈緒は、怜南を誘拐して“つぐみ”と名づけ、彼女の「母親」になることを決意する。二人で逃避行を続け、さまざまな人との出会いと別れを繰り返したが、結局奈緒は未成年者略取・誘拐罪で逮捕されてしまう。奈緒の怜南（つぐみ）に寄せる強い母性が理解され、裁判では執行猶予付の判決が下りた。保護された児童養護施設を脱走した怜南（つぐみ）は奈緒との再会に束の間の楽しい時間を過ごしたが、やがて怜南は自らの足で施設へと戻り、見送る奈緒は怜南が成人になるのを待って正式に再会できる日々を心待ちに生きていくのだった。

## 5. 授業の過程で起こったこと

- (1) 学生の葛藤とせめぎ合いの時期

各作品を視聴し、それらについての感想を最初に述べあった時、学生から出たのは、例えば「それぞれの障害の特徴や、障害者・家族の気持ちを理解して支援することの重要性」（『くちづけ』）や、「子どもに対する愛情を持つことの大切さ」（『Mother』）などであった。それは一見すると「模範的」な感想であったが、裏を返せばいわゆる「マスコミ評論」のように皮相的なものと捉えられた。筆者（三神）は、各自が未だ「自分の身に置きかえて」考えてはいないことを伝えた。そして言葉の概念規定に十分意を払うとともに、もしその問いかけを「自身のものとして」行うならば、例えば「理解」という言葉は軽々には使えないであろうことを指摘する一方、「あなたにとって」「母性」「母親像」とはどのようなものであるのか、などを投げかけていった。

- (2) 学生が「乗り越えた」時期

筆者（三神）からの「問いかける構えそのもの」についての問いかけは、授業で求められているのは「期待されている正解」を本やインターネット

から導き出すこと、と捉えていた学生がいたとすれば、思いもよらぬことだったかもしれない。テーマ設定を考える中、学生は戸惑いや行き詰まり感、「何をしたらよいか」を明示してもらえないことへの不満や突きつけられた問いへの反発すら感じていただろう。しかしその格闘の中で、自分の持っている潜在的な矛盾に気づいた時、学生は変わった。

その「矛盾」とは、例えば、『Mother』において、かつて奈緒が育てられた児童養護施設の「桃子さん」は、子どもたちのために自らを捧げるかのように生きていた。学生はそこに「無償の愛の尊さ」を見出し、「このような人になれたら」と言う。しかし、その「桃子さん」は、奈緒が再会した時には認知症となっており、すでに閉鎖された施設で独りさびしい晩年を送っていた。そこには、学生が理想とする「無償の愛の尊さ」とともに、この世にあるやりきれない「現実」があった。その「現実」をも我が身に引きつけて考慮した上での「このような人になりたい」という答えであったのか、ということである。

テーマ・視点の設定において立てられた問いを自分の身に置きかえる、つまり「自分を教材化する」姿勢の深まりとともに、学生それぞれが自分たちの中にある潜在的な価値観に気づきながら真実をみようとしはじめたように考えられる。『Mother』において自分の娘を虐待した女性を責める学生は、もはや誰もいなかった。

## 6. 学生たちの成果

シンポジウムは、現代社会における『基本的な問い』と『社会の深層にせまる問い』をめぐる、まさに“ぶつかり合い”となった。これらの課題を通して得られた学生たちの豊かな人間性の伸長、「現実への理解力」と「実態を洞察する力」と「今後の生き方への覚悟」は、筆者（三神）自身も目を見張るものであった。

その内容と成果は、学生自身の言葉の中に結実している。後へつづく人たちのひとつの参考になればと願い、学生たちの協働による成果を、可能な限りそのまま、以下に紹介する。なお、受講学生の氏名および成果の本論文への掲載については、授業の中で受講学生たちによる承諾を得ている。

## (1) 『くちづけ』グループ

1) メンバー：浅川一二美、阿部はるな、大嶋琴美、興石真帆、清水宏次郎、宝木亜希、保科このみ、宮坂彩音、山田恵里奈、横川竜馬、横澤香奈

## 2) シンポジウムのレジュメ内容

○題目：現代社会の家庭問題における、知的障害者をもつ家族の実態と課題

～映画『くちづけ』より愛情いっぽんさん（阿波野幸助さん）の決断を通して～

## ○題目の設定理由

私たちは、家庭の中で生まれ育ち、家族と切り離しきれない密接な関係をもって生きている。そして、そんな私たち一人一人が構成員となって社会は成り立っている。つまり、家庭は社会の重要な基盤である。しかし、家庭の中に障害者がいることで、社会の基盤である家庭が崩壊してしまうこともあると、私たちは映画『くちづけ』を通して知った。

映画『くちづけ』は、知的障害者をもつ家族とそれを取り巻く人々の苦しみや困難、幸せを描いた物語である。知的障害者は、自閉症やダウン症などの併発疾患であったり、軽度だったり重度だったりとその症状の幅が非常に広い。よく知られている特徴としては、読み書きや計算、物事の理解、判断などの“知的能力”や、集団のルールを守ったり他人と良好な関係を築いたりする“適応能力”に障害をもつことが挙げられる。また、全体的に一般の職場への就職はハードルが高く、障害者雇用による所得の低さに悩みを抱える人が多い。さらに、日常生活の中では、判断を誤ったりパニックを引き起こしたりすることがあるため、完全な自立生活は困難である。つまり、知的障害者をもつ家族は、知的障害者である子どもやきょうだいの人生を死ぬまで背負うことになりうるのである。

映画『くちづけ』では、そのような人生を歩むことになった様々な家族の苦しみや決意が描かれている。中でも、この物語の中心的人物である「愛情いっぽんさん」は、知的障害をもつ娘・マコちゃんを愛してやまず、男手一つで養育に尽力してきた。ある時二人は、自分たちに落ち着きや安心を与えてくれるグループホーム・ひまわり荘に出会い入所する。しかし、ひまわり荘は経営が

困難になり、さらに、愛情いっぽんさんは癌に侵され余命がわずかであることを知る。そのような状況に陥った時、愛情いっぽんさんは自分の力で娘を守り切ることができないと感じて、誰にも頼ることなく娘の“死”を決意したのであった。

私たちは、この“死”という決断に強い衝撃を受けた。そして、「愛情いっぽんさんの心中という決断の裏にはどんな苦しみがあったのだろうか。」「“死”を選択する他に方法はなかったのか。」「知的障害者をもつ家族はどんな問題を抱えているのだろうか。」など、様々な疑問や思いが浮かんできた。このとき私たちは、障害者を抱える家族の苦しみの実態を知り向き合うことの必要性を感じ、この題目を設定した。

これから対人援助職に就く私たちには、相手の抱える想いを想像してその想いに真剣に向き合っていくことが求められる。今回、知的障害者を抱える家族の実態に向き合うことで、そのために必要なものの見方・考え方をもてるようにしていきたい。そのために、以下の4つの視点を持ち、知的障害者をもつ家族についての視野を広げながら考えを深化させていきたい。

## ○4つの視点

1. 知的障害者やその家族に対する認識とは  
キーワード：知的障害者に対する認識、知的障害者への認識の背景にある問題点、社会の現状
2. 知的障害者の養育を担う家族の現実とは  
キーワード：家族の自由、成人前の養育の問題、成人後の養育の問題
3. 知的障害者とその家族が求める施設の役割とは  
キーワード：施設の種類と役割、家族が施設に求めること、施設の役割と家族の期待の相違
4. 知的障害者の将来を担う家族の葛藤とは  
キーワード：知的障害者の幸福、家族の負担、社会への期待

## 3) ある学生のレポート（下線は筆者ら）

○テーマ：現代社会における、知的障害者をもつ家族の実態と課題

【視点4 知的障害者の将来を担う家族の葛藤とは】



私は、初めて映画『くちづけ』を見た時、命を削るかのように全ての愛情をマコちゃんに注ぎ続ける愛情いっぽんさんの姿に、強く温かい父親の愛情を感じ、また、二人が共に生き続けることが叶わなかった悔しさに涙しました。特に、愛情いっぽんさんが最後に選んだ“死”という選択には強い衝撃を受けました。そして、「周囲の人にもっと頼ることが出来れば、マコちゃんは助かったのではないか」「誰かが愛情いっぽんさんとマコちゃんの現状に気付けば何か変わったのではないか」など、“死”という選択を回避する他の方法があったはずだという考えが頭に浮かびました。しかし後に、この考えは変化しました。

知的障害は、合併症や重度・軽度等により症状の幅が非常に広いです。よく知られている症状の特徴としては、読み書き・計算・理解・判断などの“知的能力”や、規律性・対人関係スキルなどの“適応能力”に障害をもつことが挙げられます。そのため、社会の中で生きていくにあたって、一般の職場への就職はハードルが高く、判断を誤ったりパニックを引き起こしたりすることもあり、完全な自立生活は困難です。映画『くちづけ』では、頼さんが職場の物を盗んできてしまったり、うーやんが他人の家に不法侵入してしまったりパニック状態になって暴力を振るってしまったりしていました。そして、そのたびに施設の職員や家族が周囲に頭を下げ、そのようなことが起こらないよう見守り付き添っていました。つまり、知的障害者は誰かの支援なしでは社会の中で生きていくことが困難で、知的障害者をもつ家族は知的障害者である子どもやきょうだいの人生を死ぬまで背負うことになりうるのです。しかし、知的障害をもつ我が子やきょうだいの人生をずっと背負い続けて生きていくことは非常に大変です。なぜなら、知的障害者と共に生きることには、幸せだけでなく様々な困難や葛藤が伴うからです。

昨年の4月に、兵庫県三田市で精神障害と知的障害をもつ40代の長男を檻に監禁していたとして、70代の父親が逮捕される事件がありました。監禁は決して許される行為ではなく、実際、このニュースの記事の言葉だけを拾えば、父親への批判が真っ先に出てくると思います。しかし、父親が「大声は出す、暴れる。やめなさいと言ってやめる子じゃ

ない。やっぱり歳と共に辛い。」と言葉を残したように、知的障害者は幼い心をもったまま体は強く大きくなっていくため、養育者が歳を重ねれば重ねるほど、養育の負担は精神的にも肉体的にも大きくなっていきます。そして、父親の「果たして、これでよかったのか。他に方法がなかったのか、ずっと考えている。未だに答えはない、はっきり言って。」の言葉からも分かるように、恐らくこの父親は長い間自分たちの力で懸命に子どもと向き合って養育をしてきたはずですが、しかし、他のきょうだいや社会に与えてしまう害やトラブルを考えた結果、どうしても監禁をせざるを得なかったのだと思います。頼るすべを失った父親が、家族の幸せや安心、社会から向けられる視線、養育の限界などの様々な要素の中で葛藤し、その末に監禁を決断したことに気付いた時、私たちが知的障害者を抱える家族の問題に対する答えを見つけられるはずがないことを実感しました。

愛情いっぽんさんも同じです。愛情いっぽんさんは、マコちゃんが生まれてからずっと男手一つでマコちゃんを養育してきました。そのため、マコちゃんに対する責任感や愛情はとても強く、誰よりも養育の大変さを知っていました。そして、愛する我が子を絶対に浮浪者にも犯罪者にもしたくない、その可能性が1%でもあれば不安で仕方ない、我が子には誰よりも幸せに笑顔で生きてほしい。そんな強い思いがあったはずですが。だからこそ、「自分が死んだらきっと誰かが面倒をみてくれるだろう」なんてそんな不確定な要素では、マコちゃんを一人この世に残していくことなんてできなかったのです。しかし、愛情いっぽんさんの身体は日に日に病に侵されていきます。そんな中で、マコちゃんの幸せを自分の手で守り抜くために、愛情いっぽんさんはマコちゃんの“死”を決断したのだとわかりました。“心中”という結果は、愛情いっぽんさんのマコちゃんへの強い愛情の形だったのだと知りました。

私たちは、この講義が始まったばかりの頃、「知的障害者をもつ家族に私たちができることは」「知的障害者とその様々な家族に見合った支援とあるべき環境とは」という題目を設定しました。その時は、“死”という選択が不幸な結果であり、それを回避するために何かできることが

あると思っていたからです。しかし、映画を見たりシンポジウムしたりすることを通して知的障害者をもつ家族の実態に向き合っていくと、知的障害者をもつ様々な家族の苦しみの皮相だけを見ていたことに気がきました。また、最初にもっていた「“死”を選択する他に何か方法はなかったのか」という考えは「愛情いっぱいさんの決断が間違いだとも正解だとも私たちには言い切れない」という考えに変わり、人の“死”は悲しく辛いものではありませんが、その死をも超越する家族の愛情の深さや強さを、胸が痛くなるほど実感しました。

ただ、私たちは知的障害者やその家族の抱える苦しみや幸せの実態をすべて理解できたわけではなく、まだまだ分からないことや理解しきれないこと、答えが見つからないことが多く残っています。健常者といわれる私たちが知的障害者やその家族の立場に立つことは決して簡単ではありません。しかし、それもまた、シンポジウムを通して「私たちが頭を抱えて考えても理解しきれないほど、知的障害者やその家族の苦しみの根は深い」と分かったことです。知的障害者は誰かの支援がないと生きるのが困難であることや、時に障害によりトラブルを起こしてしまうことは事実です。そして、そんな知的障害者を恐れて一線を引いてしまうような社会の否定的・偏見的な認識も決して間違いであるとは言いきれません。誰が悪いとかではなく誰も責めることができない、しかしそのままでは終わることのできない難しさの中で、他人の苦しみを想像してその現実を知ろうとし、共感しようとする心をもつことこそが、対人援助職に就く身としても社会の構成員としても、大切な力であることを実感しました。

今まで、様々な授業で障害について学んできましたが、今回のように障害者をもつ家族に目を向けることは初めてでした。私は来年度には教職に就き、子どもだけでなくその保護者やそれを見守ってくださる地域の方など、様々なつながりの中で多くの人と関わっていきます。その中では、様々なつながりを理解して視野を広くもち、些細なことに対しても問題意識を深めていくことが欠かせないと思います。そのためにはやはり、人の心に寄り添える豊かな感受性や豊かに考える力が必要

で、そのような人間として深みのようなものをこの講義を通して得られたような気がしています。特に、映画『くちづけ』を通して感じた、衝撃とぬくもりが混ざりあったような複雑な思いは今も消えずに残っており、この講義を通して映画『くちづけ』に出会えたことは本当によかったと思っています。この映画やシンポジウムで感じたこと、分かったことを感覚として心に残すだけでなく、これからは様々な人と関わる中で自分のもつべき姿勢として大切に生かしていきたいです。(以下略)

## (2) 『Mother』グループ

1) メンバー：長田愛実、櫛原八重花、後藤晃子、志村佑希、古屋花純、保坂朱梨、三澤綾香、山本幸奈

### 2) シンポジウムのレジュメ内容

○題目：母親とは何だろう ～ドラマ『Mother』を通して、様々な角度から見る母親像～

#### ○題目の設定理由

私達がこの題目に取り組もうと考えた理由は、坂元裕二脚本のテレビドラマ『Mother』という作品を通じて、「母親」とは何なのか、母親の本質を考えていきたいと思ったからである。

家庭は人間が生きていくための大地であり、社会の最も基本的な単位である。そのため家庭を良くしていくことは、社会を良くしていくことでもある。その家庭において、母親は欠かすことのできない存在であり、家庭の柱ともいえる存在である。しかし、現代社会において子どもを産み母親となった後、様々な要因から母親が母親としての役割を果たせなくなってしまい、崩壊してしまう家族もある。そのことを私たちはドラマを見て気づかされた。そこで、家庭の柱ともいえる「母親」とは何かを考察していくことで、現代社会の家庭の問題についての視野を広げていけるのではないかと考えた。

「母親」とは何かを考えていく中で、私達の抱く母親像はそれぞれ異なっていたけども、母親を一面的にしか見ておらず、曖昧なものであったことに気付いた。私達が描く母親像は、子どものために一生懸命な母親・優しい母親・子どもに愛情を注ぐ母親など、良い母親ばかりであった。母親も一人の人間であるのにも関わらず、社会が抱く「良い母親」でない者に対しては冷たい視線が向

けられる現状があり、それは私たち自身も例外ではない。その中で、社会は母親に対して「良い母親」というものを求めすぎているのではないかという疑問が生まれた。私達は今後、保育や教育の仕事に就き多様な母親と関わっていく中で、「母親」の本質を様々な角度から見ていかなければならないと感じた。

この作品にも、いろいろな母親が登場する。

- ・誘拐してでも、母親として子どもの命と心を守ろうとした鈴原奈緒さん
  - ・夫の死を境に生活も心も余裕がなくなり、実の娘に虐待をしてしまった道木仁美さん
  - ・子どもの罪を背負い、社会的に隔離されながら、後に遠くから子どもを見守る望月葉菜さん
  - ・血は繋がっていない子どもを養子として大切に育ててきた鈴原藤子さん
- などである。みな異なる状況の中で母親としてそれぞれの子どもと向き合っている。

例えば道木仁美さんの場合では、子どもに愛情を持ち大切に育てていたのにも関わらず、夫の死により生活が行き詰まり、境遇が変化し虐待に至ってしまった。また、鈴原奈緒さんの場合では、反社会的な行為を犯してまでも自分の子どもとして育てようとした。

道木仁美さんや鈴原奈緒さんは特に私たちに衝撃を与え、「母親」とは何かということを考えさせるきっかけとなった。様々な母親を考えることで以下の4つの視点から、現代社会のもつ家庭の問題について母親像を考察していくことで、私達の人生観や価値観・社会観を育てていきたい。

#### ○4つの視点

1. 母親の役割とは ～一日の家事労働と生涯にわたる役割の変化に着目して～
  - ・幼少期の母親の役割  
【目を離せない、自己犠牲】
  - ・児童期の母親の役割  
【子どもの成長に伴う支援、基礎基本を定着させる】
  - ・青年期の母親の役割  
【子どもに割く時間の減少、自立のサポート】
  - ・成人期以降の母親の役割  
【人生のサポート】
2. 「人間としての母親」と男性の関わり

- ・男性が寄せる期待

【男性の傾向、結婚後の女性への理想像】

- ・母親がパートナーに寄せる期待

【女性の傾向、結婚後の男性への理想像】

- ・男性により変化する母親の人生

【良い方向、悪い方向】

3. 私達が抱く「母親像」と作品に登場する多様な母親の共通性と独自性

- ・家庭環境【家族構成、祖父母からの協力】

- ・経済状態【満足、満足ではない】

- ・人間関係【家族関係、友人関係】

- ・母の性格

【ネガティブ、楽観的、真面目、天然】

4. 子どもにより変化する家庭と母親

- ・子どもの有無【経済状況、夫婦の関係】

- ・実子か否か【兄弟関係、周囲の反応】

- ・子どもの障害の有無【経済状況、愛着】

- ・子どもの性格・能力【母親の思い】

- 3) ある学生のレポート（下線は筆者ら）

私は、現代社会における家庭の問題について、坂元裕二脚本のテレビドラマ『Mother』という作品を通して考えていった。『Mother』は、男性を始め、様々な要因によって変化をしていく多様な母親たちについて描かれている。この作品を通じて、「母親」とは何なのか、母親の本質を考えていった。その中で、①母親の役割とは、②「人間としての母親」と男性の関わり、③私たちが抱く「母親像」と作品に登場する多様な母親の共通性と独自性、④子どもにより変化する家庭と母親の4つを視点に挙げ、シンポジウムに取り組んだ。その中でも今回は、③私たちが抱く「母親像」と作品に登場する多様な母親の共通性と独自性について詳しく論じていく。

家庭は人間が生きていくための大地であり、社会の最も基本的な単位である。その家庭において、母親は欠かすことのできない存在であり、家庭の柱ともいえる存在である。しかし、現代社会において子どもを産み母親になった後、様々な要因から母親が母親としての役割を果たせなくなってしまい、崩壊してしまう家庭もある。そして、その様な母親に対しては冷たい視線が向けられる現状がある。『Mother』の中でも、そんな母親達が描かれている。夫の死により境遇が変化し、子ど

もに虐待をしてしまう母親・子どものために罪を背負うことを決意し、子どもから離れていった母親・罪を犯してまでも、子どもの命と心を守ろうとした母親などである。そして、このような母親は『Mother』だけの話ではなく、現代社会にも存在する。しかし一方で、私たちの抱く「母親像」は、それぞれ異なっていたが、『Mother』に登場する母親とは違い、子どものために一生懸命な母親・優しい母親・子どもに愛情を注ぐ母親など、良い母親ばかりであった。このことから、私たちが抱く「母親像」と『Mother』に登場する母親や社会から冷たい視線を浴びる母親とでは何が変わるのか、逆に、共通しているところはあるのか、そして私たちの抱く「母親像」はなぜ良いものしかないのかなどといった疑問が生まれた。

私たちの抱く「母親像」とは、いつも見て傍で感じている姿であり、つまり自分の母親の姿である。私たちの抱く「母親像」は、経済状況に満足しており、家族はもちろん、家族以外にも頼れる人や支えてくれる人の存在があった。またアンケート結果から、母親自身の性格については、ネガティブや楽観的・真面目・天然など様々であることが分かった。しかし、悩みを抱えた際にどうするかについては、ほとんどの母親が誰かに相談をすると回答した。一方『Mother』に登場する母親は、経済状況や母親自身の性格は多様であったが、家族など支えてくれる人の存在がないという人がほとんどであった。

私たちの抱く「母親像」と作品に登場する母親たちとの共通性を見ていくと、どのような状況や形であっても子どものことを愛しているということは全員に見られた。そして、鈴原藤子さん・夫が生存していた頃の道木仁美さん・鈴原奈緒さんの3名の場合では、経済状況・頼れる人の有無・母親自身の性格について、私たちの抱く「母親像」と共通性が見られた。まず経済状況は、私たちの抱く「母親像」と同様に、不満がない程度には暮らすことが出来ていると考える。例えば鈴原藤子さんは、子どもの人数が多い上に夫がいなくとも、会社の社長であるため経済状況には苦勞していない姿が見られた。また夫が生存していた頃の道木仁美さんは、経済状況に余裕があるとまでは言い切れなくとも、夫と共働きをしながら不自由がな

い程度には暮らすことは出来ていたと推測する。そして鈴原奈緒さんは、働いている上に独り身であることから、お金を使うこともあまりなく、経済状況には満足していると推測した。頼れる人の有無についても、私たちの抱く「母親像」と同様、3名全員に自分の家族や近所の人・会社の人など、頼れる人が存在した。そして母親自身の性格についても、「母親像」と同様に、元気・神経質・努力家など様々であると読み取ることが出来る。反対に、私たちの抱く「母親像」と比較して独自性が見られた人物は、夫が亡くなった後に愛人と暮らしている（現在の）道木仁美さん・望月葉菜さん・鈴原藤子さんの3名である。この3名は私たちが抱く「母親像」とは異なり、様々な理由で夫がいなかった。また、現在の道木仁美さんと家庭が壊れる前（過去）の望月葉菜さんの場合には、支えてくれる人の存在がなかった。望月葉菜さんに関しては憶測ではあるが、仮に相談をする人など支えとなる存在がいたとしても、悩みを誰かに相談せずに1人で決断をしていた姿から、性格としても誰にも相談せずに自分で解決しようとする性格であったのだと考える。鈴原藤子さんの場合は、夫がいなかったことに加え、3人中1人が養子であるという独自性が見られた。

私たちの抱く「母親像」と共通性のある鈴原藤子さん・夫が生存していた頃の道木仁美さんは、金銭面や人間関係などで辛く苦しい場面も何度かあった。しかし、母親自身が母親の役割を果たせなくなる状況になることはなく、家庭も崩壊する様子は見られなかった。鈴原奈緒さんも経済状況や頼れる人の有無など共通性は見られたが、頼れる人の親密度に違いがあった。私たちの抱く「母親像」と鈴原藤子さん・夫が生存していた頃の道木仁美さんは、頼れる人は自分の子どもや夫がほとんどであり、頼れるというよりいざというときに近くで支えてくれる人であった。しかし鈴原奈緒さんの頼れる人とは、会社の仲間であり、仕事のこと以外の私情については頼ることが出来ない関係であったと推測する。この様に、頼れる人は存在したものの、いざというとき近くで支えてくれる人の存在はなかったため、1人の子どもの命と心を守ろうとしたときに、誘拐という反社会行動に出るしか方法がなかったのだと考える。一方



私たちの抱く「母親像」と比較して独自性が見られた夫が亡くなった後に愛人と暮らしている（現在の）道木仁美さん・望月葉菜さんは、どちらも母親としての役割を果たせなくなってしまうという結果に至り、家庭も崩壊してしまっている。どうして私たちの抱く「母親像」と異なり、その様な結果に至ってしまうのかと考えたところ、やはりいざというときに近くで支えてくれる人の有無が重要であるのだと感じた。現在の道木仁美さんには同居している男性がいる。しかし、その男性は道木仁美さんに子どもよりも自分を優先してほしいという思いがあると考ええる。道木仁美さんは、この男性に女性としては支えられている部分があるものの、母親としては支えられていないどころか、何一つ頼ることも出来ていない。望月葉菜さんもまた、過去の夫に頼ることが出来なかった。そのため、現在の道木仁美さんと過去の望月葉菜さんは、悩みを抱えたとしても、それを相談する場がなかった、あるいは性格的に相談することが出来ず、1人で背負い込むしかなかったのだと考える。そして1人で背負い続けた結果、自分も虐待をしてしまう、子どもを残してどこかへ消えてしまうなど、社会から冷たい視線を向けられてしまう様な行動をとるという結果に至ってしまったのではないかと、むしろ至るしかなかったのではないだろうか。鈴原藤子さんも夫がいなかったことや、子どもが1人養子であるという独自性はあったが、私たちの抱く「母親像」と同様に、自分の子どもや会社の仲間など、近くに支えてくれる人の存在があったり、自身の経済力もあったりし、余計な悩みや不安を抱え続けることがなかったのだと考える。

現代社会にも、鈴原奈緒さんと道木仁美さん、望月葉菜さんのような母親としての役割を果たせなくなってしまう母親は存在する。特に道木仁美さんのように自分の子どもに虐待をしてしまう、あるいは自分の子どもが虐待をされていても見て見ぬふりをしてしまうという母親はニュースでも多く報道される。そして、それを見た人々は「なんて母親だ」「母親失格」「子どもが可哀そう」などという言葉の口にする。例えば、2014年のネットで出会った自称保育士を名乗る男性ベビーシッターに預けられた2歳児の男児が死体で発見され

た事件がある。この事件が報道されたときも、社会は母親の無責任さや無知を批判する声が噴出したという。しかし、私たちが目を向けるべきところは、母親が犯した結果ではなく、そこまでせざるを得ないほど追い詰められていた母親の状況ではないだろうか。私たちが抱く「母親像」と『Mother』に登場する多様な母親を比較したところ、経済状況や置かれている状況、人間関係などは様々ではあったが、唯一全員が共通していたものは、子どもを愛しているということであった。このことから、母親は誰しも子どもを愛しているということには変わりないことが分かる。それは、私たちの母親や鈴原藤子さん・過去の道木仁美さんはもちろんのこと、結果的に反社会行動を犯してしまった現在の道木仁美さんや鈴原奈緒さん・望月葉菜さん・自称保育士を名乗る男性ベビーシッターに子どもを預けた母親などにも言えることである。また、私たちが抱く「母親像」は家庭関係や経済状況などが安定しており寄り添える人がいたため、家庭が崩壊することはなかったのだと思う。そして私たちは、その様な良い面ばかりを見てきたために、現在の道木仁美さんや鈴原奈緒さん・望月葉菜さん・男性に子どもを預けた母親とは異なり、子どものために一生懸命な母親・優しい母親・子どもに愛情を注ぐ母親など良い母親像しか浮かばず、それとは異なる母親には冷たい視線を向けてしまうのではないかと考える。しかし、母親は私たちと同じ1人の人間である。私たちと同じように失敗もすれば、つまづくこともあり、間違っただ道に進んでしまうこともある。だからこそ、支えとなる人の存在が何より必要なのではないかと。そして、母親（女性）にとって一番近い支えとなる人は夫（男性）であると考ええる。もちろん会社の人や自分の子どもも支えとなる母親もいるとは思いますが、『Mother』でも分かるように、男性によって母親（女性）は多様に変化していく。しかし、もちろん男性だけではなく、母親を取り巻く経済状況や家族関係、人間関係、母親自身の性格など様々な要因が積み重なることでも母親は多様に変化していく。

私たちが1人の人間であるように、母親も「母親」ではなく「1人の人間」であることを再認識した。それと同時に、今まで「母親」としてしか

見ていなかったことに気付かされた。加えて、ただ「母親」としてではなく、必然的に私は「良い母親」として母親を一面的にしか見ておらず、その私が抱く「良い母親」を勝手に押し付けていたことにも気付かされた。そしてそれは、社会においても例外ではない。人はみな環境や経済などの状況や個々の性格など人それぞれであるのに、私を含む現代社会は、母親に対して沢山の良いものだけを求めすぎている。また、家庭の中でも、母親は誰よりも家事や育児など家族のために時間を費やしているにも関わらず、夫や祖父母もまた社会と同様、それを当然のことの様に捉え、母親だけに押し付けてしまっている。ここに母親の重荷があり、その重荷が積み重なっていくことで母親を深く追い詰め、母親の役割を果たせなくなる現状が生まれていく。子どもへの虐待や子どもの置き去りなど母親による反社会行動は、私たちが母親の支えともならずに追い詰めるだけ追い詰めた結果である。それにも関わらず、現代社会はその様な母親に対して冷たい視線を向けてしまっている。この様にして家庭の柱ともいえる母親を家庭や社会が追い詰めていくことで、母親は崩れていき、家庭の問題にも繋がってしまう。それを防ぐためにも、私たちは今後対人援助職としても、現代社会の一員としても、母親も1人の人間であるという視点を持ち、「母親」というものを多面的に捉えていくことが大切であると実感した。また対人援助職として、母親にとって支えとなる存在の一つになれるような関係を築いていくことが私たちの目標であると、今後の課題について気づかされた。

## 7. おわりに一はなむけの言葉に代えて

高校時代にある先達から言われた「『分かる』というのは傲慢、『分からない』のは怠慢だ」という一言。そして精神障害者グループホームの世話人だった頃、出入りしていたクリニックで顔見知りだった患者さんが自ら命を絶ったと聞かされた時の凍りついたような沈黙。

本稿をまとめるお手伝いに加わり、「家庭問題特論」に取り組んだ学生たちのコメントやレポート、そして担当教員の言葉に触れる中で、筆者

(野中) がこれらの一見脈絡ない記憶を想起したのは、そのいずれもが「お前に何が分かるというのだ？」という問いを突きつけられた経験だったからかもしれない。

対人援助の専門職に就く者は、相応の知識や技術を習得し、ある程度の職務遂行能力と自己効力感の芽生えを携えて、その道へと入っていく。その際、突き放した言い方になってしまうが、知識や技術の習得は（得手不得手の差はあれど）比較的「たやすい」のである。なぜなら、知識や技術の習得の如何は多分に各自が匙加減をコントロールできる領域にあるからである。しかし、対人援助職にある者が出会うのは、自分とは全く異なる、時に自分の想像を絶する生を重ねてきた「他者」である。その他者に対して何か「援助的」な関わりへ入ろうとするとき、もしこちらが自身でコントロール可能な力だけをもって何がしかの貢献ができるとしてしまえば、関わりを誤る危険は高まるだろう。「分かった」気になって下手を打てば、相手か自分の命を脅かすことになる、という事態も、現実世界では起こりうるのだ。

では、どう歩みだせばよいのか。少なくとも始められることは、「自分の理解を超えたところに生きている人がある」と、認めることではないだろうか。そして、比較考量の対象としてはささやかであるかもしれないが、少なくともここまで何とか生きてきた自分自身から生じる「実感」を手がかりに懸命に「理解しようとする」こと、自分も他者もうち捨てずに省みるありように踏みとどまることなのではないだろうか。しかし、このような眼差しを自他ともに向けつづけるというのは、多大な「勇気」を伴う営みでもある。

「家庭問題特論」における取り組みは、保育専攻の学生たちが、投げかけられた自他への問いに戸惑いや時には憤懣すら感じながらも、果敢に向き合い、対人援助職としてのとば口へ立つに至った軌跡であり、同時に本学専攻科における学びの経験のある意味集約した営みであるとも思われた。

本教科を修めた学生たちは、同時に専攻科の課程を修了して、社会へと巣立っていく人たちでもある。今後のご多幸を、心より祈念したい。